

セシル・アンドリュ (2010年11月11日)

発電所美術館を訪れる人は誰でもその少し変わった建物に惹かれると思います。私はさらにその上、美術館の前面にきちんと区画整理され、手入れの行き届いた耕作地が広がっていることに強い印象を受けました。

耕作は土地を耕して穀物などを栽培することであり、これをフランス語でculture（キュルチュール）と言います。耕作が人間の生物学的な命を養うための基本的な活動であることは言うまでもありません。

他方、美術館では展覧会や音楽会あるいは講演会などが開かれます。これらの活動は我々の生命を養ってはくれませんが、知性を磨き教養を高め精神を豊かにしてくれます。我々はそのために美術館や音楽堂に出かけます。フランス語で精神を養うこともまたcultureと呼んでいます。

命を養う耕作と精神を養う文化、フランス語で共にcultureと呼ばれる事柄がここ入善の美術館で展開していることが、私には非常に意味深く感じられました。インスタレーションのタイトルを"culture2"とした理由です。

美術館の中に入って私の目を引きつけるのは、二階に設けられたロフトです。このロフトの床面は美術館の空間全体を上下二つに分けているように見えました。そこでこの床面を基準として同じ高さの平面体を空間全体に行き渡らせ、これをインスタレーションの骨格としました。

まず、平面体の下に広がる一階の空間を外の農耕地の延長とみなし、その象徴として育苗トレーを用いることにしました。トレーは平面体の下面に貼り付けて3メートルの高さに吊り下げました。したがって、その下の訪問者はほの暗い空間の中でトレーの底を見上げることとなります。ここは農耕地といっても、耕地の下に広がる地下の世界です。暗くて何もなければ、静かに包み込んでくれるような空間にしたいと思いました。

次に、階段を上って地上に出ると、足下には平面体が淡い光に照らされて美術館の向こうの壁まで広がっています。ここは文化の世界です。それを象徴するために、平面体は巨大な原稿用紙の構造とし、その升目には一枚ずつシュレッダーにかけた大量の地元の新聞を盛り込むことにしました。

新聞を用いたのは、新聞が事件とともに様々な文化事象を取り上げて

いること、そして何より新聞そのものがひとつの文化事象であるからです。

また、原稿用紙の構造を取り入れたのは、私にとって、原稿用紙が日本の文化、正確には日本語の象徴に見えるからです。パソコンが普及した現在どれだけの人か原稿用紙を使っているかわかりませんが、私が日本に来た30年前、多くの日本人は原稿用紙を使っていました。一升ひとます、文字を書きつける姿は原稿用紙を持たない文化に育った私にとって印象的でした。そのとき以来、私の中で言葉と原稿用紙は強く結びついているのです。

今回のインスタレーションでは、5×15、計75の升目を持つ原稿用紙とし、これが平面体の上面を、そして下面を育苗トレーが構成するようにしました。トレー9個分が原稿用紙の升目一つに相当しています。このような平面体を二つ制作し、それを左右に並べて美術館の天井から吊り下げました。

以上のように、育苗トレーと原稿用紙を用いて平面体を構成することにより、耕作としてのcultureが文化としてのcultureを支えつつ、両者が一体となっている姿を暗示しようとしたのです。

ところで、新聞はシュレッダーにかけられて粉々に裁断されています。新聞の断片からはもはやいかなるメッセージも読み取ることはできません。そこにあるのはただの紙切れの山です。これは一見とても乱暴な行為に見えますが、私には非常に大事な作業です。

現代イタリアの文学者、イタロ・カルヴィーノは、我々の世界は言葉のかさぶたで重く被われていると言っています。

私が見る世界は・・・すでに言葉によって支配されているように見える。それはディスクールの厚いかさぶたに重く被われた世界なのである。我々の人生の様々な出来事は、それが生じる以前において、すでに分類され、判断され、説明されてしまっている。我々は存在しはじめる前にすべてがすでに読まれている世界の中に生きているのだ。・・・我々が見るもののみならず、われわれのまなざしさえもが言葉で飽和している・・・」

「書かれた世界と書かれてない世界」（1983年NY大学での講演より）

私はこのかさぶたの端をそっと持ち上げて風を吹き込み、言葉で飽和する以前のまなざしを取り戻してみたいのです。そのためには、言葉の意味作用を鎮め、おしゃべりを止めさせなければなりません。新聞をシ

シュレッダーにかけるのはそのためです。無言で静謐な空間、それを造形することがこのインスタレーションのもう一つの目的なのです。

原稿用紙の升目に言葉の断片を盛り込む作業では、断片と断片の間に空気が流れるようにふんわりと盛ること、また、盛られた断片の山は、文字の白黒と写真の色がほどよく混じり合って淡い陰影が生まれるように留意しました。そして、言葉の断片で埋め尽くされた原稿用紙全体には、人工照明を均等に当てながら、さらに外から自然光を取り入れることで、時間とともに微妙に変化していく効果を期待しました。静かで柔らかい気持ちになって、無言の微かな息づかいを感じてもらいたいからです。

1999年の作品「Immolation」（犠牲）(p.20,21,23)は、鉛活字を素材とした作品です。ハンマーで叩いて活字を潰しました。言葉の記号としての働きをおさえる試みのひとつです。活字を叩くと微かなすき間やひびが入ります。イタロ・カルビーノの「かさぶた」にあたかも割れ目を入れていくような感触です。

「Ouverture」（開口）（2010）(p.20,21,22), 「Human」（人間）（2010）(p.24)と「Inversum—in」（倒置—in）(p.25)にはフランス語の辞典を用いました。ページを切ったり、折ったりして、言葉の姿を消しました。言葉が無くなった後の空虚に焦点を当てる作品です。

「Vocemx4」（p.18,19）は今回の展覧会のための新作です。構造的に美術館の上部の四角の窓と対話する、4枚のフレームからなっています。各フレームの中には、シュレッダーにかけた辞典の断片が埋められています。3枚のフレームにはそれぞれにフランス語、チェコ語、日本語を埋め込み、4枚目にはこれらの言語に英語を加えた断片を混在させました。これらは、今年（2010年）、私が個展を開いた国の言葉であり、またその際コミュニケーションで用いた言語です。表面のパンチング・メタルの細かい穴は、言葉の断片をのぞき見るための穴であり、また同時に、無言が「流れ出る」スピーカーの穴でもあります。